

Title	草創期の三田史学(一) : 歴史観の視点から
Sub Title	Historical school of Keio Universtiy during its formative years (1) its views of history
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.11(185)- 18(192)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第一回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0011">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0011</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 草創期の三田史学 (一) —— 歴史観の視点から ——

神山四郎

ご指名にあずかりました神山でございます。先輩の林先生がお見えいただいておりますが、私から話せという司会者の命令ですから、私から口を開かせていただきませう。

慶應の大学部ができて百年目にあたり、きょうこのような会が開かれたことは大変おめでたいことであります。一昨年でしたか、三田史学会で近森さんが企画された「三田史学の現代」というテーマでシンポジウムをやりましたが、あのときには、福沢が歴史について考えていたことをいまだう見るか、つまり現代から福沢をどう読み取るかというのがテーマであったかと思えます。そのとき、私は本当ならそれをやる前に、史学史的に福沢からその山脈が現在までつながっている三田史学の史学史をきちつとやっておく必要があるというようなことを

申し上げたのですが、実は私うつかりしております、そのときは大学部創設百年になる近くだということを知りませんでしたので、考えもなしにそんなことを申し上げたのですが、今年ちょうど百年祭にあたって、このような機会にこういうテーマを掲げられたことはまことに結構なことだと思います。

しかし、私自身がそんなことをしゃべるには用意もないし力もありませんので、大変おこがましいから、誰か専門の方に話していただきたいと言ったのですが、坂口さんがきょうは自由に思い出話みたいなことも交えて話せばいいのだと言われたものですから、組織的にやる準備がないままのんびりと、思い出話みたいなことでお話してみたいと思えます。

この秋には出版物が出るようですから、多少まとまっ

たことはこの夏休みの間に少し調べて書き物にしておきたいと思うので、きょうはそんなわけで何となくふらふらとここへ出て参りましたので、思いつくままのことを申し上げて、他の先生方との話のつながりができればと願っております。

私に与えられましたテーマは、福沢諭吉から田中萃一郎に至る草創期の三田史学という大変大きなテーマでございます。

慶應義塾そのものが成り立つもとであると同時に、慶應の文学部、さらには史学科がで上がるもとになるお二人ですから、このお二人についてだけのことと言えるかと思うとたいへんですが、歴史観について言えばいいのだということですから少し安心しました。

福沢諭吉の歴史観については、フランスのギゾーから受けた問題とイギリスのバックルから受けた問題があります。福沢は、このギゾーとバックルから受けたものを独特の方法で一つにして、『文明論之概略』という本を書いたわけであります。福沢先生はその『文明論之概略』を明治八年（一八七五）に書きましたが、それ以前に『西洋事情』（慶應二年、一八六六）で、自分の考えとして生の形ですが相当進んだ考えを持っているので、

初めてギゾーを読みバックルを読んで新しく知ったということではどうもありません。しかしながら、この二人の歴史家から受けた影響は大きいものです。両方とも文明史、ヒストリー・オブ・シビリゼーションという表題の本ですが、その内容は必ずしも同じようなものではないのです。文明の進歩という観念にしても英仏流の見方の違いが浮かび上がってまいります。

もう一人の田中萃一郎は、塾生のときにルードウィヒ・リースからドイツの歴史学を学んでいます。リースは日本に明治二十年（一八八七）に招聘されて参りまして、十五年間東京帝大で教えたわけですが、日本に最初に西洋近代の歴史学を導入した人でもあります。リースは東京帝大で教えている間に、慶應だけに非常勤講師として二年間教えに来てくれました。リースという人はドイツを出るときには英語はできなかつたようですが、日本へ来るまでの船の中で五十日ほど英語を勉強したようで、日本へ来たときにはどうやらえつちらおつちら英語ができて、授業は英語でやったようです。よく学生に向かって話しかけられたそうですが、それに応じられたのは田中萃一郎一人だったということです。田中が一番リースの議義をよく理解したというふうに聞いておりま

す。

このリースという人は、ドイツの近代史学を始めたレオポルド・フォン・ランケの弟子で、ランケに直接習ったのですが、ドイツ風の国家史観、あるいは政治史観と言われる歴史観を持った人です。方法的にはランケ譲りの厳密な史料による実証というものを確立した歴史家であります。この方法をリースが日本に明治二十年に移し植えたわけではありますが、リースの教えを受けたのは田中萃一郎一人ではなくて、阿部秀助、それから後で河北さん、林さんがお話し下さると思いますが、幸田成友などは皆リースから西洋史学の基礎を学んでおります。

もう一つ言わなければならないことは、田中萃一郎がドイツへ留学をいたしますが、その時期は明治三十八年から四十年、一九〇五年から七年にかけてであります。そのときにライプチヒ大学のカール・ランプレヒトのところへ行つて勉強をしております。ところが、ランプレヒトという人は、歴史家には珍しい向こうっ気の強い論争家でありまして、十九世紀の末に『歴史学における新旧傾向』という大変戦闘的な本を書いて、ランケはもう古臭い歴史家だといって真向切つてランケを批判しまし

た。

では、どういふのが新しい方法かという点、その当時イギリス、フランス、つまり進んだヨーロッパの国々に一般的に行き渡っている科学方法論のいわば万能主義、あるいは科学信仰と言つてもいい、つまり何でもかんでも科学でやれるのだというもので、科学と言わなければ人でないと言われたくらいのものでした。その影響をドイツへ引き込んだのがランプレヒトです。味方になつてくれたのは民族心理学のヴントぐらいしかいなかったよ、うで、ドイツの歴史家はみなこれに対して伝統的な歴史学の方法を主張して抵抗しました。これが一つの口火になつて、新カント派の哲学者がこの議論を引き受けて歴史の方法論争を巻き起こしました。これは大変大きな論争で当時学界を大きく揺るがしたと言つてもいいかと思ひます。

結論としては、新カント派の考えたのは、自然科学のような法則を立てる方法と歴史学のような個別的記述をする方法は違ふのだ、全然別の方法なのだといつて、二つの科学方法論を立てたのであります。歴史学は自然科学とは違ふ精神科学、あるいは文化科学の一種なのだといふわけです。ところがランプレヒトは歴史家でありま

すが、その自然科学的方法を取り込む方にくみした人でした。そこへ田中萃一郎は行つて学んでいるわけでありますから、福沢と田中という二人のわれわれの大先輩の歴史観の中には、全く相容れない二傾向、あるいは三傾向が入っているわけであります。

まずはギゾーですが、フランスのギゾーはソルボンヌの教授であります、この人はフランス革命から大きなインパクトを受けております。そしてこの市民革命、政治革命を中心にヨーロッパの文明史を考えておりました。

文明が進むためには価値が偏つてはいけない、権力が集中してはいけない、価値を多様化し権力を分散させて、そこで民心全体の知的発達をはかるといふタイプの文明史観、文明進歩史観でありました。バックルの方はもうちよつと後の時代で、この人はイギリスの産業革命から大きなインパクトを受けております。歴史というものは科学的知識の発達だ、科学技術の進歩だ、これが歴史を進めてゆくものだといふ、非常にラディカルな科学主義を主張しております。それですから、バックルとギゾーとは必ずしも同じような歴史観ではないわけです。ギゾーの場合は非常に大きなスケールで、ローマ帝国が滅んでからフランス革命時代に至るまでの大きな展望の歴

史を書いて、そこで着々と、ヨーロッパ社会が進歩して行つた過程を大づかみにつかむ、という構想を持つております。バックルの方は科学的な方法を取り込んで、いままでの歴史学は単なる記述学である、英雄とか偉人を中心に個別的事件を書くだけの記述学である、これではまだ科学になつていない、もっと科学的な方法を取り入れろといふのです。たとえば個人中心ではなく社会集団といふものをもとにして歴史を見る、あるいは統計学の方法を導入してみろといふようなことを主張しているであります。

福沢は、この二つの違つた種類の歴史観、両方とも文明の進歩とは言つていますが、その文明の内容はかなり開きがあるのですけれども、これを取り込んで、それを大変うまいぐあいにアレンジしています。つまり、大きな歴史の構想を立てる上ではギゾーの考えを取つて、時にはギゾー風の形而上学と言つてもいいような歴史の展望論を書き、バックルからは科学的な方法論を積極的に取り込んで、いわゆる近代科学の一つとして歴史学が自然科学と同じようにやれるような、そういうものを考えたいわけがあります。結局、この二つは福沢の頭の中で完全に方法的に統一できないままで、二つの主張が二つあ

るという形で終わっているわけでありませう。この点については後で申し上げたいと思います。

田中の方はどうかと言いますと、まずは、リースを通して最もよきリースの理解者だったと言われる田中がランケ史学の方法を取り込んだわけですが、このランケ史学は、いうまでもなくプロイセンのナシヨナリズムに強く裏づけられて発達した国家史観、政治史観であります。ナポレオンに攻められてドイツの諸領邦が壊滅して、これでは仕方がない、一日も早くフランスに対抗できるような統一ドイツをつくろうという機運に乗って上がってきた歴史学でありますから、当然強烈な国家史観、政治史観の形を取っております。しかしながら、ランケは他方方法的には史料による厳密な実証ということを主張して、堅実なドイツ風の歴史学の基礎を築いたのであります。ですから田中は慶應では、プロイセン風の強烈なナシヨナリズムをリースの歴史観から聞いたと思うのです。しかし、ドイツのランプレヒトのところへ行つて、それと全く反対な新しい科学的方法、むしろどちらかといえば、バックルの方法に近いようなランプレヒトのもとで勉強しているわけでありませう。

その食い違いがどのようになるのかということですが、

これはひと通りの話が終わった後で申し上げたいと思ひます。とにかく田中萃一郎先生は非常に大きなスケールの学者で、ご承知のとおり西洋史だけではなくて東洋史の方にも、それから日本史にわたつても非常にすぐれた研究をしております。広い視野で、取りわけ西洋について言えば、単にプロパーの歴史学だけではなくて、政治論、政治学、あるいは政治史にまで広くわたつてたくさんものを書いております。そしてそのどれもが非常に高い水準のものであります。田中先生を一人の歴史家と見ることはできない、それほどスケールの大きい人でありませう。

田中先生の東洋史学に与えた影響、あるいは日本史の方に与えた影響、それと西洋の政治学、政治史、政治論の方は後の先生方からお話を承ることができると思ひます。私は西洋史の中での歴史観に限って申し上げます。つまりリースを通して知つたランケの歴史観とランプレヒトの歴史観という相容れないものの中で、先生がそれをどのよう処理したのだろうかということが私にとつては一番大きな興味でございます。田中先生は慶應で史学概論を講義しておられますが、その歴史の方法論、史学研究法というのを見ますと、非常に堅実な史料によ

る実証主義を貫いていて、いわゆるランプレヒト流の法則論や類型論のようなものは全然出てこないのではありません。しかしながら歴史観として見ますと、ランケ風のナシヨナリズムに貫かれているかと思うと、そうではなくて、非常にリベラルな、どちらかというラスキなどに近い、イギリス流の影響が強いように見受けられます。

では、ランプレヒトの影響が何もないかというところではなくて、ランプレヒトはガイステイガー・デア・パソン、つまり精神的音階とでもいいますか、そういうようなもの、つまり音楽にドレミファソラシドの音階があるように、歴史にも精神の階程がある、時代毎に一つの規則性があるというのです。音楽は音階の上に乗ってメロディーが奏でられるように、人間の歴史も精神的なデア・パソンに従っているいろいろなヴァリエーションがあるのだというのです。それを時代ごとに一般化して、七つの時代類型を出しました。法則というほどのものではないのですが、その時代の一般的特徴が、一つの精神的な類型として、古代ではアニミズム、中世ではシンボリズム、現代は主観主義だといったようなまとめ方をしているのです。歴史というものは、個人中心につくられるのではなくてツォシユタント、つまり社会状態として見

ると、バックル流に言えばコレクティヴィズムでありますが、そういう方法をランプレヒトは主張しているのです。

田中先生はそういうところはどうも取っていないようです。先生は、歴史というものが、固い厳密な科学的説明だけで終わるのではなくて、さりとて単なる記述主義に終わるのでもない、そこに「想像力」というようなものを考えておられました。そういうものによって歴史が叙述されるのだということです。だから歴史の記述というものは、専門家を満足させるだけの厳密な実証性がなくてはならないけれども、子供が読んでもおもしろいと思われるような叙述力がなくてはならないと言っておられるのです。そのようなところにランプレヒトのいう想像力という主観的なものを敷衍して取り込んでいるというふうに思われます。

なおもつと細かいところでどのように取り込んでいるのかは、先生の未刊行のノートがございましたので、せんだって田中荊三先生の奥様のお宅に伺って拝借してまいりましたので、この夏そのノートをゆっくり見まして、はつきりしましたら秋に書きものにしたと思います。いま見たところではそのようなことなので、田中

先生はランプレヒトのところへは行つても、科学方法万能論とか歴史の法則論を振り回すというようなことはしなかつた。そのために日本へ帰つてこられて、慶應に史学科をつくり、極めてオーソドックスな史学の基礎を植へ付けたのでしよう。慶應では非常に堅実な史料実証主義の方法が根付いているのはそのためです。そこへもつてきて、先生は非常に広い視野の歴史観を、歴史研究の外にまでまたがつて持つというスケールの大きい三田史学の基礎を築いたわけでありませう。

しかし、一方田中先生はその当時のドイツの方法論争に大変興味をお持ちになつて、帰つてこられるとすぐ哲学の船田三郎先生をドイツに留学させて、歴史哲学の本格的な研究をさせました。つまり、ご自分が、そう言つてはなんです、しろうと学者として歴史哲学をやらずに、本職の哲学者にやらせたということも、先生の賢明さであつたと思うのですが、それが慶應に歴史哲学の流れをどこの大学にも先駆けてつくつたわけでありませう。そのもとやはり田中先生のアイデアにあつたと言つてよろしいかと思うのです。ドイツの古い歴史哲学の文献目録にはS. Tanakaが日本で初めて歴史哲学を講義したと書いてありますが、それはあながち間違ひとはいへな

いと思ひます。

結局、幸田成友先生、それから橋本増吉先生、阿部秀助先生は皆リースのお弟子さんですが、こういう方々が慶應の史学科をつくつてまいります。またその学問の基礎に、バックル流、あるいはランプレヒト流も入れますが、その悪しき半面の方が持ち込まれていないのが幸いです。よき半面、つまり社会科学の方法を導入する、コレクティヴィズムをとる、ランプレヒトの言う社会状態を重視するといった進んだ方法は取り込むが、法則論とか類型論というようなものに歴史学を持つていくというようなことはしなかつた、そのところが三田史学の基礎の上には非常にうまく作用したと思うのです。船田先生が歴史哲学を教えて、河北さんや私の塾生時代には史学科の学生も皆歴史哲学を履修したけれども、史学概論とは矛盾しないで、変な衝突や混乱を起こさないうで、ちゃんとやつていけたのは田中先生がそうレールを敷かれたからだろうと思つております。

一応与えられた時間でございますので、ここで区切らせていただきます。

司会 どうもありがとうございます。

いまお聞きのように、神山先生から福沢諭吉と田中萃一郎に焦点を絞りました。歴史観の面からのお話を伺いました。次に同じ福沢諭吉より田中萃一郎までにつきまして、今度は国史のほうから名誉教授の河北先生にお話を伺いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。